



筑摩世界文學大系

14

モンテーニュ

II

原 二 郎 訳



エセー

筑 摩 書 房

筑摩世界文學大系 14

昭和四十八年三月二十五日

初版第一刷発行

モニターニュ
Ⅱ

訳者 原 二郎

発行者 井 上 達 三

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号一〇一―一九一

電話東京二九二七六五一

振替口座東京四一二二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0398 (製品) 20614 (出版社) 4604

目次

エセー

原二郎訳

第二卷（第十三章—第三十七章）

5

第三卷（第一章—第十三章）

136

モンテーニュ小論

サント・ブーヴ
渡辺一夫訳

393

解説

原二郎

416

年譜

436

索引

モンテ・ニユ
Ⅱ

凡 例

本書に使用したテキストは *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. p. Pierre Villey, Paris, Felix Alcan, 1922, 3 vol. ^{やあろ。かたひら} *Les Essais de Michel de Montaigne*, éd. p. Fortunat Strowski et Gebelin, Bordeaux, F. Pech, 1906-1933, 5 vol. を参照した。

モンテーニュの「エッセー」は、一五八〇年に、九十四篇が二巻に分けて刊行された。それから八年を経て、一五八八年に、さらに十三篇が第三巻として刊行された。それと同時に、第一巻と第二巻に、ほとんど改作に近い大増訂がほどこされた。これが一五八八年版である。その後モンテーニュは、改版を目指して、一五八八年版の一本を常に座右に置き、その余白に自筆で丹念な細字で次々と書き加えをして、死ぬ間際までその仕事をやめなかった。これがボルドー本といわれる原本である。今日の決定版であるボルドー市版はこの原本を元にして作られたものである。

訳文中、(a)は一五八〇年版のテキストを、(b)は一五八八年版における増訂の部分を、(c)はその後モンテーニュが自筆で加筆した部分を示す。

訳文中、前後に一行を明け、三字下げた箇所は主としてラテン語の韻文の引用である。行を明けずに《》印を付した箇所はラテン語の散文の引用である。いずれもテキストの体裁にならったものである。中に数箇所、ギリシア語、フランス語、イタリア語の引用のある場合は、その旨を注でこわった。引用の出典はテキストにはないが、注において示した。本文の中で、モンテーニュが典拠とした著者および著書の箇所をも注においてできる限り示した。

本文のなかの〔〕は訳者の注である。

エセー

第二卷 (つづき)

第十三章 他人の死を判断することについて

いて

(a) 確かに死は人間の生涯においてもっとも注目すべき行為であるが、他人が死ぬときに示す落着きを判断するには、次のことを銘記しなければならない。すなわち、「人はなかなか死期に達したとは思わないものだ」ということである。これが自分の最後だと覚悟して死ぬ人はほとんどない。また、そのときほどはかない望みに欺かれることもない。その望みがわれわれの耳に絶えず、こうささやく。「他の人たちはもっと病気が重かったが死ななかった。おまえは人が思うほど見込みがなくてはならない。いざというときには、神様がいろんな奇蹟をお示しになった」と。われわれはあまりに自分を重大なものとして自惚れるからこう考えるのである。自分が滅亡すれば、全世界が何かの損害をこうむり、われわれの状態に

心を動かすように思うのである。われわれの目が混乱しているために、事物も同じように混乱して見え、事物が見えなくなると、目の前から去ったように思い込むのである。ちやうど海を行く者が、山も、野も、町も、空も、陸地も、自分と一緒に揺れ動いていると感ずるようなものである。

(b) 自分が港から遠ざかると、陸地も町もうしろに退く。

自分の悲惨と悲痛を、世間と道義のすたれたせいで、昔を讀え、現在をけなさないような老人が一人でもいるだろうか。

今や年老いた農夫は、頭をふりながらためいきをつき、過ぎし日を今と比べ、しばしば祖先の幸運をたたえ、昔の人々がいかに信心深かったかをくりかえす。

われわれはすべてを自分とともに引きずってゆく。

(a) その結果、自分の死を重大なことを考え、それがそんなに軽々しく、星辰のおごそかな協議を経ずに、起こるものではないと考えるようになる。(c) (一人の人間のまわりにこんなにも大勢の神々が大騒ぎをする。)(a) として自分を買いかぶることが多ければ多いほどますますそう考える。(c) 「何だと。これほどの知識が失われてこれほどの損害をひき起こしているのに、運命の神々は特別の心づかいを示さないのか。これほどまれな、世の鑑ともいふべき魂を死なせることが、普通の、役にも立た

第十三章

(1) ウェルギリウス「アエネイス」三の七二。

(2) ルクレティウス「事物の本性」二の二六五。(以下「事物の本性」を略す。)

(3) 大セネカ「弁論軌範」一の一四。

ない魂を死なせることよりも損失ではないのか。あれほど多くの他の生命を庇護し、あれほど多くの他の生命から頼られ、あれほど多くの人々を使い、あれほど多くの地位を満たした生命が、自分ひとりにだけ一重結びでつながっている生命と同じように、この世を去っていいのか」と考える。

われわれは誰も、自分がただの人間にすぎないことを十分に考えない。

(a) カエサルが、彼をおびやかしている海よりもっと増長して、船頭に言った次の言葉もそこから生まれたのである。

もしもおまえが神の御加護を疑ってイタリアまで行くのをためらっているなら、私を信じて漕いでゆけ。おまえがためらうのは、おまえののせている私が誰であるかを知らないからだ。……

さあ、私の守護を信じて嵐をついて漕いでゆけ。

次の言葉も同様である。

カエサルは、この危険を自分の運命にふさわしいものと信じて言った。この私をくつがえすことは、神々にとつてもこんなに苦労だと見え、小さな艦に坐っている私にこんなにも大きな海で襲いかかる、と。

(b) また、「太陽はカエサルの死をいたんで、まる一年の間、額に喪の印をいただいた」という人々の空想も同様

である。

カエサルが死ぬと、太陽もまた、ローマをあらわんで、自分の輝く額をくすんだ錆色でおおった。

これに似た空想はたくさんあるが、世間はそれにやすやすとごまかされて、われわれの損失が天を変えらると思つてゐる。(c) 無限の天がわれわれの区々たる差別に心を動かすと思つてゐる。《天とわれわれとの間柄は、われわれが死ねば、星辰の光も死ぬほど、親密なものではない。》

(a) さて、危険の中にありながら、自分でまだ本当にそう思わない人を見て、決断と剛毅をもっていると判断するのは正しくない。そのような態度で死んだというだけでは十分ではない。本当にその覚悟ができて死んだのであれば十分ではない。たいていの人は、生きているうちにそういう評判を享受したいばかりに、勇ましい顔色や言葉をとりつくり。(c) 私はいろんな人の死ぬところを見たが、その立派な態度はいずれも運命によるもので、自らの意志によるものではなかった。(a) したがって、昔の、自ら死を選んだ人々についても、その死が急激な死であつたか、暇のかかる死であつたかを区別して考えねばならない。あの残忍なローマ皇帝は、捕虜たちに死を感じさせてやりたいと言つて、獄中で自決した者がある。と、「あいつは私の手をのがれた」と言うのが常だつた。つまり、責苦で死を延ばして、とくと死を味わわせてやりたかつたのである。

(b) われわれは、瀕死の人が、全身傷だらけにな

(4) 自分の生死が自分一人にしか影響のない人を指す。

(5) ルカヌス「ファルサリア」五の五七八。

(6) 同右、五の六五四。

(7) ウェルギリウス「農耕詩」一の四六五。

(8) プリニウス「博物誌」二の八。

(9) カリグラを指す。在位三七四一。残酷と浪費で有名。

(10) スエトニウス「カリグラ伝」三

(11) カリグラではなく、ティベリウス帝の言った言葉である。スエトニウス「ティベリウス伝」六一。

りながら、まだ致命傷を与えられずに、苛酷な生き残りによって、死を延ばされているのを見た。

(a) 本当に、まったく健康で落ちているときに自殺を決心するのはそれほど偉いことではない。まだ死と取組み合いをしない前に強がり言うのは実にやさしいことである。だから、世にも女々しいヘリオガバルスでさえ、情弱な快楽に耽っているうちから、いよいよ死なねばならぬときに急に自殺のできる方法を考えていた。そして、自分の死がそれまでの一生にふさわしいようにと、身を投げるために、わざわざ豪華な塔を建てさせ、その土台と正面に金や宝石で飾った板金を張らせ、首をくくるためには、金と緋の絹糸をより合わせた綱を作らせ、身を突き刺すためには、金の剣を打たせ、毒をあおぐためには、碧玉や黄玉の器に毒を貯めさせて、そのときの気持次第でこれらすべての死に方の中から好きなのを選ぶようにしておいた。

(b) やむをえず勇猛果敢になって。

(a) だが、この人は、こんなぜいたくな用意をしたために、いざというときに、かえって、怖気づくだろうと思う。けれども、この人よりもっと逞しい人々が自殺を決心した場合についても、それが結果を感じる暇もないほど、ひと思いの打撃によるものかどうかを見なければならぬ。というのは、肉体の感覚と精神の感覚が混じり合う中で、生命が少しづつ流れてゆくのをしながら、思いとどまる道もとに残されているのに、それでもなお決心を変えずに頑として、これほどの危険な意志を貫いた

かどうかは、疑問だからである。

カエサル⁽¹²⁾の内乱のときに、ルキウス・ドミティウスはアブルツツイ⁽¹³⁾で捕えられ、毒を飲んだが、あとで早まったことをしたと悔んだ。われわれの時代には、ある人が死ぬ決心をして、一太刀突き立てたが、肉のずきずきする痛みに腕が鈍ったので、さらに二度、三度と強く傷つけたが、ついにずぶりと突き刺すだけの勇氣が出なかった。(c) ブラウティウス・シルヴァヌスは裁判にかかっている間に、祖母のウルグラニアから届いた短刀で自決することに失敗して、部下に命じて血管を切ってもらった。(b) テイベリウス帝の時代に、アルプキラは自害しようとしたが、あまりに弱く切りつけたためにかえって敵に捕えられて、彼らの方法で殺された。大将のデモステネスもシケリアの潰走のあとに同じ目に会った。(c) ガイウス・フィムブリアも自分で突いたが、突き方が弱すぎて、家来に止めを刺してもらった。反対に、オストリウスは自分の腕を使うことができなかったが、家来の手を借りることをいさぎよしとせず、ただ、短刀をまっすぐにしっかり持つていってだけ命じて、自分から走っていった喉を突き刺して死んだ。(a) 本当に、これは十分に鍛えた喉をもたない人にとっては、嘔まずに吞み込まねばならぬ食物である。だからハドリアヌス帝は、侍医に命じて、乳首の致命的な箇所を円い印で囲ませ、自分を殺せと命じた者が狙うときの目印にしておいた。カエサルも、そういう死がもつとも望ましいかと聞かれて、「もつとも思いがけなくもつとも短い死だ」と答えた。

(b) カエサルがあえてそう言ったのだから、私がそのように思っても卑怯ではあるまい。

(a) プリニウスは、短い死は人生の最大の幸福である、

(12) ルカヌス「ファルサリア」四の一七八。

(13) ローマ皇帝。在位二八—三〇。シリヤに生まれ、日の神エルガバルスの祭司であったが、軍隊に推されて、十四歳で即位した。ローマでは、その母とともに日の神の狂信におちいり、素行もおさまらず、軍隊の暴動によって殺された。

(14) ルカヌス「ファルサリア」四の七九八。

(15) ルキウス・ドミティウス・アエノバルプス。前五四年のローマの執政官。貴族党の有力者としてポンペイウスとカエサルに反対していたが、両者が不和になってから、ポンペイウスに荷担して、最後はファルサロスで戦死した。

(16) イタリア中部の山岳地帯にある町。

(17) プルタルコス英雄伝「カエサル」三四。

(18) 同名の前二年の執政官の息子。一世紀のローマの政治家。不明の原因から妻を殺したかどで告発されて自殺した。

(19) タキトゥス「年代記」四の二二〇。

(20) 一世紀のローマの貴族のサトリウス・セクンドゥスの妻。多くの恋人をもっていたことで有名。テイベリウス帝に対する不敬のことで処刑された。

(21) タキトゥス「年代記」六の四八。

(22) 前五世紀のアテナイの將軍。雄弁家のデモステネスとは別人。

(23) プルタルコス英雄伝「ニキアス」二七。

(24) 前一世紀のローマの軍人。マリウスを熱心に支持した。マリウスの死後、アジアでミトリダテスと戦って勝った。スメラがアジアに到着するや、

と言った。死を認めることはつらいことである。だが、死を考えることを恐れ、目を開いてこれを見ることに堪えられない者は、死の覚悟ができていたとは言えない。死刑の宣告を受けた者が、その最後に向かって走り、処刑を急がせ、せき立てるのは、覚悟ができてするのではなく、死を考える暇をのぞきたいからするのである。死んでいることがつらいのではなくて、死ぬことがつらいのである。

死んでいることは何でもないが、死ぬことがいやなのだ。

この程度の決断ならば、私にもできそうな経験がある。これは目をつぶって、海に飛び込むように危険に飛び込むのと同じである。

(c) 私の考えでは、ソクラテスの生涯には、三十日の間、死の判決を反芻したこと以上に輝かしいことは何もないと思う。しかも、その期間を通じて、動揺も変化も見せずに、しっかりと希望をもち続け、このような重大な思案のために力みも興奮もせずに、平静な、むしろ無関心と言つてもよいほどの言動を保ち、静かに死をかみしめていたこと以上に、輝かしいことは何もないと思う。

(a) キケロがあの書簡を宛てたポンポニウス・アッティクスは、病氣にかかったもので、婿のアグリッパと二、三の友人を呼んで、「自分はこれまで病氣をなおそうとしても無益なことを思い知ったし、生命を延ばそうとしてすることはすべて苦痛を延ばし増大するだけであることを思い知ったから、今度は生命と苦痛の両方を終えようと決心した」と言つて、この決心に賛成してくれるよう

に頼み、もしそれがいやなら、せめて、決心をひるがえさせようと無駄骨を折らないでほしいと頼んだ。そこで自殺をするために断食を選んだところ、はからずも病氣がなおり、死のうとしてとつた方法で健康を回復した。医者や友人たちはこの好運な出来事を祝い、彼とともに喜び合ったが、それがとんだ思い違いであることがわかった。というのは、それまで彼の意見をひるがえさせることができなかったからである。彼は、いずれば越えねばならぬ通路だし、せつかくここまで来たのだから、わざわざ改めて出直すことはしたくない、と言つてきかなかった。この人は死を心ゆくまで知つたあとで、死と会うことに、平氣だつたばかりでなく、熱中した。というのは、戦を始めたときの理由を満足させた上に、さらに雄々しくも、その最後を見届けようとしたからである。死を少しも恐れないことと、死に触れてこれを味わおうとするということとの間には雲泥の差がある。

(c) 哲学者のクレアンテスの話はこれとよく似ている。彼は、歯茎が腫れて腐つたために、医者からきびしい断食を命じられた。二日間断食をするたいへんよくなつて、医者からも、なおったからいつもの生活に帰つてよいと言われた。ところが、衰弱の中ですである快感を味わつていたので、いまだ後に下がるまいと決心して、すでに十分に進んできていた道をそのまま突進した。

(a) トゥリウス・マルケリウスというローマの青年は、我慢ができないほどにつらい病氣をのがれるために、寿命の先廻りをしようと思ひ、医者から、急にはないがきつとなおると言われたけれども、友人たちを呼んでそのことを相談した。セネカによると、ある者は、臆病のために彼ら自身がしそうなことをすすめる、ある者は、へ

これと戦つて敗れ、自殺した。
(25) アッピウス・ミトリダテス戦争(六)。

(26) プブリウス・オストリウス・スカフラ。四七年のローマの補欠の執政官。ブリタニア征服を指揮した。五六年憔悴の果てに死んだ。
(27) タキトゥス「年代記」一六の一五。

(28) ローマ皇帝。在位一七―三八。伯父のトラヤヌス帝のあとを受けて皇帝に推され、努めて平和政策をとり、内治に力を用い、また、文芸美術を奨励した。
(29) クシフィリヌス(ヘドリアヌス伝)の終章。

(30) スエトニウス「カエサル伝」八七、およびブルタルコス論理論集「古代諸王および諸帝書簡集」。

(31) プリニウス「博物誌」七の五三。
(32) キケロ「トルクタルム論議」一の八。

(33) テイトウス・ポンポニウス・アッティクス。前二〇九―前三。ローマの富豪で、キケロの親友。アテナイに住みギリシアの学芸を愛好したことから、アッティクスの名前を得た。キケロが彼に宛てた書簡は公刊されて、十六巻に上つてゐる。
(34) コルネリウス・ネポス「アッティクス伝」二二。

(35) デイオゲネス・ラエルティオス「クレアンテス篇」七の一七六。

つらつて、彼にもっとも気に入るようなことをすすめた。しかし、あるストア学者はこう言った。「マルケリヌスよ、何か重大な事柄でも考えるように悩むことはない。生きるということは大したことではない。きみの召使たちや家畜も生きているではないか。むしろ、立派に、賢明に、毅然として死ぬことが大事なのだ。きみがいつから同じことを繰り返しているかを考えてみたまえ。食って飲んで寝て、飲んで寝て食うだけではないか。われわれはしじゅうこの輪の中を廻っている。不幸な、堪えがたい出来事ばかりでなく、生の飽満も、死にたい気持ちを起こさせるのだ。」だが、マルケリヌスに必要なのは忠告する人ではなく、手伝う人だった。召使たちはかかり合いになることを恐れたが、この哲学者は、「召使に嫌疑がかかるのは、主人の死が自殺かどうか疑わしい場合だけだ。それ以外に、主人が死ぬのを妨げるのは、殺すのと同じくらい悪いことだ。なぜなら、

本人の意に反して命を助けるのは、殺すのと同じことだ、

ということもあるからだ」と言い聞かせたあとで、マルケリヌスに向かって、「食事のあとで食卓の上に残ったものを会食者に分け与えるように、一生を終えたあとにそれまで仕えてくれた召使たちに何かを分けてやるのは不似合いなことではなからう」と忠告した。ところで、マルケリヌスは鷹揚で物惜しみをしない人であったから、いくらかの金を分け与えて、彼らをねぎらった。その上、死ぬのに剣も必要としなかった。彼はこの生から逃げようとせずに、立ち去ろうとし、死から逃れようとせ

ずに、死を試そうとした。そこでゆっくりと死を考察するために、あらゆる食物を断ち、三日後に微温湯をそそがせながら少しずつ弱っていった。彼の言うところによると、そこにはいくらかの快感がなくなかった。事実、こういうふうな、衰弱によつて心臓が弱ってゆくのを経験した人々は、少しも苦痛感がなく、むしろ睡眠や休息に移ってゆくときのようである快感を感じると言っている。

以上は、観察され味わわれた死である。

けれども、ただカトーの場合だけは、彼の好運が、彼をあらゆる点で徳の模範とするために、われとわが身に剣をつき刺したその手に傷を負わせて、危険の中で意気沮喪させるどころか、勇氣百倍させて、死とゆっくり顔をつき合わせ、死の首根をとらえてねじ伏せる暇を与えたものらしい。もしも私が彼のもっとも堂々たる様子を描くとしたら、当時の彫刻家たちが描いたように、剣を手にした姿ではなくて、血にまみれながら自分の臓腑を引きちぎっている姿を描いたであろう。このあとの死に方が前のよりもずっとものすごいからである。

第十四章

いかにわれわれの精神は自らの邪魔をするか

(a)人間の精神が二つの同等の欲望の真ん中に宙ぶらりんになっていると考えるのは、おかしい想像である。それでは、精神はいずれとも決定ができないにちがいない。いずれを好み、いずれを選ぶかということは、価値の不同を意味するからである。そこで、酒壺とハムの間に坐

(36) ホラティウス「詩論」四六七。

(37) セネカ「書簡」七七。

(38) プルタルコス英雄伝「小カトー」七〇。およびセネカ「摂理について」二。

って、飲む欲望と食う欲望とをまったく同じにもった人は、渴きと飢えのためにきつと死ぬしかないことになる。この不都合に備えて、ストア派は、「どちらでもよい二つのものについて、われわれの心に選択が起るのとはなぜか。多くの銀貨の中から一つを選ぶのとはなぜか。みな同じ銀貨で、特にそれを選ぶべき何の理由もないのに」という問いには、「この心の動きは、外的な、偶然の、気まぐれな衝動から来る異常で不規則な動きである」と答えている。私にはむしろこう言えるような気がする。「われわれの前に現われるどんなものにも、必ず、わずかながら、何かの差異がある。またそこには、たとえ知覚できなくとも、つねに他のものよりも、われわれの視覚が触覚を引きつける何かがある」と。前と同じ論法で行けば、ここにどの部分も同じ強さの紐があるとすると、この紐は絶対に切れるはずがないということになる。というのは、それはいいたい、どの点で切れることができるだろうか。それとも、あらゆる点がいっぺんに切れるのだろうか。これは自然にはありえないことである。もしも以上の事柄に、さらに、確実な証明によって、「含まれるものは含むものよりも大きい」、「中心は円周と大きさが等しい」と結論したり、「絶えず接近しながらけつて交わることはない二直線」を見いだしたりする幾何学上の命題とか、化金石とか、円積法とかの、理論と実際が矛盾する事柄をつけ加えるならば、そこからおそらく、あのプリニウスの《不確実以外に確実なものは何もない。人間以上に惨めで、思ひ上がったものは何もない》³という大胆な言葉を支持する何かの論拠を引き出せるかも知れない。

第十五章 われわれの欲望は困難に会うと増大すること

(a) もっとも賢明な哲学の一派は「反論のない理由はない」と言っている。私はいまちようど、ある昔の人が生命を蔑視する理由として「いかなる幸福も、それを失ったときの覚悟ができていなければ、楽しみとはなりえない」(c)《あるものを失った悲しみと、失うのではないかという心配とは同じように苦痛である》(a)と言う名句を噛みしめていたところである。これはつまり、生を失うことを恐れるならば、真に生を楽しむことはできない、という意味である。けれども逆に、こうも言えるかも知れない。「われわれはこの幸福が確実でない」と知れば知るほど、また、奪われはしないかと心配すればするほど、それだけしっかりと、愛情をこめて抱きしめる」と。実際、火は寒い空気に会うとおこるように、われわれの意志も、反対に会うとかき立てられるというのがわれわれの実感である。

(b) もしもダナエが青銅の塔に閉じこめられなかったら、ユピテルの子をみごもらなかったらうに⁵。

(a) また、容易さから来る飽満ほどわれわれの意欲を自然にそぐものはないし、稀有と困難ほどそれを刺激するものはないというのも、実感である。《あらゆる事柄の快楽は避けるべき危険のあることによってますます増大する》⁶。

第十四章

- (1) プルタルコス倫理論集「ストア派の矛盾」。
- (2) 円と等積の正方形を作る作図問題で、解決不能とされている。
- (3) プリニウス「博物誌」二の七。

第十五章

- (1) 懷疑派を指す。
- (2) セネカ「書簡」四。
- (3) 同右、八八。
- (4) ダナエはアルゴス王の娘。王は娘の子に殺されるだろうという神託を信じて、彼女を青銅の塔に閉じこめたが、ユピテルが黄金の雨に身を委して彼女と交わった。
- (5) オウィディウス「恋愛詩」二の一九の二七。
- (6) セネカ「恩恵について」七の八。

ガラヤよ、拒め。喜びにも苦しみがまじらないと、愛は飽きて来る。

リュクルゴスは愛情に活気を与えるために、ラケダイモンの夫婦は人目をさけてでなければ交わってはならぬ一緒に寝ているところを見られるのは他人と寝ているのを見られるのと同じく恥辱である、という命令を出した逢引きの困難、人から見られることの危険、翌日の恥かしさこそ、

憔悴と、沈黙と、胸の奥底から漏れる吐息と、

ソースにびりつとした味を与えるものである。(c)どれほど多くのきわめて好色な面白い遊びが、恋愛の作品の貞潔でつましい語り方から生まれたことだろう。(a)肉欲でさえ、苦痛の刺激を求める。肉欲は、うずく痛みに皮をすりむくとき、いっそう甘美なものとなる。娼婦のフロラによると、ポンベイウスと寝たときに、彼の身体に歯で噛んだ跡をつけないことは一度もなかったそうである。

彼らは恋い求めるものを激しく抱きしめ、相手の身体に痛みを与え、ときにはその唇に歯を打ちつける。それは、隠れた刺激が、彼らの狂気の元となるものを、何に限らず、傷つけるように駆り立てるからである。

すべてがこのとおりで、困難は事物に価値を与える。

(b)アンコナの人々はサン・ジャック・ド・コンボステ

ル寺院にお祈りをしたが、ガリシアの人々はノートル・ダム・ド・ロレット寺院にお祈りをした。リエージュではルッカの温泉を、トスカナではスバの温泉をありがたがる。ローマの剣術の学校には、ローマ人の姿がほとんど見られずに、フランス人がいっぱいいる。偉大なカトーも、われわれと同じで、妻が自分のものであった間はいやがったが、他人のものとなると恋しがった。(c)私は、牝馬の匂いをかぐとどうにも手に負えなくなる年老いた馬を種馬飼育場へやってしまったことがある。この馬は、いつでもできるといふ容易さから、すぐにその牝馬ともに食傷した。けれども、よその牝馬が放牧場のそばを通るのを見かけると、たちまちうるさくいななき出して、前と同じようにいきり立った。

(a)われわれの欲望は、手中にあるものを軽蔑し、それを飛び越えて、手もとにないものを追い求める。

手もとにあるものをさげすみ、逃げるものを追いかける。

われわれは何かを禁じられると、それを欲しがる。

(b)もしもおまえがおまえの娘を見張らなくなったら、彼女はすぐに私に捨てられるだろう。

(a)それを自由に任せられると、軽蔑するようになる。欠乏と豊富は同じ不幸におちいる。

おまえはそれが多すぎて困っているが、私は少なすぎて困っている。

- (7) マルティアリス、四の三七。
- (8) プルタルコス英雄伝「リュクルゴス篇」一五。
- (9) ホラティウス「エポドス」一一の九。
- (10) プルタルコス英雄伝「ポンベイウス篇」二。
- (11) ルクレティウス、四の一〇七六。
- (12) アンコナは、イタリア中部、アドリア海に面する港町。すぐそばにロレットの町があり、そのノートル・ダム寺院は巡礼の地として有名。
- (13) 昔のスペイン西部の州の名。首都はサン・ジャック・ド・コンボステルで、有名な寺院がある。
- (14) ベルギーの東部、ムーズ河に沿った都市。
- (15) イタリア半島北西部の都市。
- (16) リエージュの南東の町、鉱泉で有名。
- (17) プルタルコス英雄伝「小カトー篇」二五。
- (18) ホラティウス「風刺詩」一の一〇八。
- (19) オウィディウス「恋愛詩」二の一〇四七。
- (20) テレンティウス「フォルミオ」一の三の一〇。

欲望と享楽は同じようにわれわれを苦しめる。愛人たちの謹厳なのは、うんざりするが、あまり容易にいうことをきくのは、本当のところ、もつとうんざりする。なぜなら、不満や怒りは、欲するものを尊重する気持から生じて、愛を刺激し、燃え立たせるが、飽満はただ嫌悪を生むだけで、鈍い、だらけた、疲れた、眠った感情だからである。

(b) もしも長く恋人をおさえておきたいなら、すげなくせよ。

恋人たちよ、相手をさげすむふりをせよ。そうすれば昨日こばんだ女も今日はなびいてくる。

(c) ポッペアが美しい顔をおおうことを思いついたのは、恋人たちの目にその美しさをいや増すためでなくて何であらう。(a) すべての女が見せたいと思ひ、すべての男が見たいと思う美点を踵の下までおおうのはなぜだろう。男女の欲望がひたむきに集中する部分を、彼女らがあんなにたくさん障害物で、これでもかこれでもかとおおるのはなぜだろう。また、わが国の婦人たちが近頃脇腹を守るのに用いたあの巨大な稜堡は、われわれを遠ざけることによって、かえって欲望をそそのかし、おびきよせるためでなくて何であらう。

彼女は柳の陰に逃げてゆくが、始めから見つかることを望んでいる。

(b) 彼女はときどき上衣に身を包んで、はやりにはやる私をおしとどめる。

(a) あの乙女らしい羞恥の科は何のためだろう。落着きはらった冷たさや、きびしい顔つきや、教えるほうのわれわれよりもよく知っている事柄を知らないふりをするのは何のためだろう。われわれに、これらのすべてのとりすました儀礼や障害を征服し、抑えつけて、欲望の足下に踏みじってやろうという気持を増大させるためでなくて何であらう。なぜなら、このやさしいおとなしさと初々しいしとやかさを熱狂させて放埒にし、誇らしげな、いかめしい謹厳さを情熱の思ひのままにすることは、われわれにとって、楽しいばかりでなく、名譽でさえあるからだ。「厳格、羞恥、貞潔、節制を征服することは名譽である」と言われる。ご婦人方にこれらの性質を捨ててようにそそのかす者は、彼女らと自分自身をあざむくものである。われわれにとつては、彼女らの心が恐怖にふるえ、われわれの言葉に純潔な耳を汚され、いやいやながら、われわれのしつこさに負けてやむをえず同意するのだと信ずることが必要なのだ。美人はいかに万能でも、こういう仲立ちがないと、十分に味わってはもらえない。イタリアに行つてごらんさない。多くの売物の美人が、中にはもつとも美しい者までが、男の歡心を買うために、美貌以外のいろんな手段を用いねばならないかを。それでも、実をいうと、誰でも金で買えるということのために、どんなことをしても、その美しさはやはり弱くて力がない。ちょうど、われわれが徳においてさえ、同じ二つの行為のうち、より多くの障害と危険のあるほうを、より美しく、立派なものと考えようようなものである。

(21) オウイディウス「恋愛詩」二の一九の三三。

(22) プロペルティウス、二の一四の一九。

(23) ローマの王妃。オトーと離婚してネロの妻となったが、のち、夫に敵られて死んだ。

(24) 鯨骨のたが骨を用いて婦人のスカートを大きく拡げることが流行したことを指す。

(25) ウェルギリウス「田園詩」三の六五。

(26) プロペルティウス、二の一五の六。

ごらんの通り、神の神聖な教会を、あれほどの混乱と嵐に揺すぶられるがままに任せておいたのは、この対照によって、数度な魂をよび覚まし、あの長い泰平のためにおちいついていた無為と惰眠から救おうとする神の摂理の現れである。もしもわれわれが、道を踏みはずした多くの人々から受けた損失と、この闘争を契機として、われわれが息を吹きかえし、信心と力を回復したことから得た利益とを比べてみるならば、利益が損失を上廻るのではないだろうか。

われわれは、結婚の結び目をほくすすべての手段を除くことによって、これをいっそう固くしたと思ひ込んで来た。けれども、強制の結び目がきつくなっただけ、それだけ意志と愛情の結び目がほくけて、ゆるんだのである。これと反対に、ローマ人の間で、あんなに長い間、結婚の名譽が尊重され安泰だったのは、いつでも自由に離婚ができたからである。彼らは妻を失うことがあるかも知れないために、いっそう妻を愛した。だから、いつでも離婚ができる状態にありながら、五百年以上も経つのに、一人としてこれを実行した者がなかった。

許されたことには魅力がない。許されないことは欲望をかき立てる。

これには、次の昔の人の意見を合わせて考えることができよう。「刑罰は悪徳を鈍らせずに、かえって刺激する。(b) 刑罰は善をなそうとする気持——これは理性と規律の仕事であるが——を生まずに、悪を犯しながらつかまると、まいとする気持だけを生む」と。

悪は根絶されたように見えてかえって広く拡がる。

(a) この意見が正しいかどうかは知らない。だが、これまでに刑罰によって国の秩序が改善されたためしがないことは経験で知っている。道徳の秩序や規律はこれとは別の何らかの方法によって維持されるものである。

(c) ギリシアの歴史には、スキュティアの隣のアルギッパイオイ族のことが書いてある。彼らは人を打ちこらす鞭も棒もたずに暮らしていた。彼らを攻めに行こうと企てる者がいないばかりか、ここに逃げ込むことのできた者は、彼らの徳と敬虔な生活のおかげで、命が助かり、誰からも指一本触れられなかった。よその土地にもめごとがあると、彼らは早速、調停を頼まれた。

(b) ある国民は庭や畑の境界を木綿の綱で囲っているが、われわれの堀や垣根よりもずっと安全で堅固である。

(c) 《錠前は泥棒を誘う。押入り強盗は戸の開いた家の前を素通りする》。おそらく、入りやすいということがわが家をわが国の内乱の暴力から守るのに役に立った最大の理由であろう。守備は攻め気を誘い、警戒は攻撃を呼ぶ。私は兵士たちの行為から、危険を冒し武勲を輝かす材料——これは常に彼らの口実と弁解に役立った——を全部取り除いて、彼らの意図をくじいてやった。正義が死んでいる時代には、勇敢な行為はすべて立派な行為となる。私は、彼らに、私の家を征服することが卑怯で裏切行為だと思わせている。私の家は、門をたたく人には誰にでも開かれている。備えといえは、ただ昔風の、儀式張った門番が一人いるだけで、門を守るといふよりも、むしろ礼儀正しく、いんぎんに招き入れる役目をし

(27) オウイディウス「恋愛詩」二の一九の三。

(28) セネカ「寛容について」二の二三。

(29) ルティリウス「旅日記」一の三九七。

(30) 黒海北部の沿岸のサルマティアに住む一種族。

(31) ヘロドトス、四の二三。

(32) ゴマラ「インド通史」三〇三〇。

(33) セネカ「書簡」六八。

ている。私は、私の運命から与えられるもの以外には、番人も守衛もおかない。貴族たる者が守備をもっていることを見せびらかすのは、完全なものでない限り、間違っている。どこか一方が空いていれば、四方が空いているのも当然である。われわれの父たちは要塞を築こうなどとは考えなかった。現代では、邸を攻撃し襲撃する手段は（私の言うのは大砲や軍隊を用いない攻撃のことであるが）、日に日に防禦の手段を越えて増加しつつある。人間の知恵は一般にこの方向に鋭くなってゆく。侵略はすべての人に關係があるが、防禦は金持だけのものである。私の家は建てられた当時としては堅固だった。私は堅固さという点ではその後何もつけ加えなかった。堅固さが逆に自分にはね返ってくることを恐れたのである。それに、平和な時代が来れば、防備を取りはずさなければならなくなる。そのときに、元通りに戻せなくなる恐れもある。また、いくら堅固にしたからと言って、安心しておれるものでもない。なぜなら、内乱の場合には、自分の召使が自分の恐れる敵側に内通しているかも知れないし、宗教が口実に使われる時代には、肉親でさえも正義の陰にかくれて、信用できなくなるからである。まさか国家の財政がわれわれの家の守備兵を維持してはくれない。そんなことをしたら国家の財政は枯渇する。それを維持するには、われわれ自身が破産するか、さもなければ、いつそう不都合で不正ではあるが、人民が破産するしかない。人民が破産するよりも私が破産するほうが私にとっては困らないであろう。それに、破産してごらんなさい。友人たちでさえ、気の毒がるところか、面白がつて、あなたの油断や、不明や、武人としての職務に對する無知や無関心を非難することだろう。多くの防備

をほどこされた家が破滅したのに、かえって私の家が持ちこたえたところを見ると、これらの家は防備をほどこされていたために破滅したのではないかという気がする。防備は攻撃者に攻撃への欲望と理由を与える。あらゆる防備は戦争の相貌をおびる。神様の思召しとあれば、誰でも私の家に攻めて来るがよい。だが私はいかなる場合にも、わが家に敵を誘うようなことはしない。わが家は戦争の疲れを休める隠れ家である。私は、自分の心中にある一隅を守るのと同じように、国家の嵐からこの一隅を守ろうとつとめる。わが国の戦争がどんなに形を変え、どんなに新しい党派に分かれて増えてゆこうが、私自身は動かない。こんなにもたくさんの方々が武装された中であつて、私の身分の者で、自分の家の守りをすっかり天に任せたのは、私の知る限り、フランスでは私だけだ。私は一本の銀の匙も、一枚の証書ももちださなかった。私は恐れようとも、生半可に助かるうと思わない。もしも十分な感謝が神の御加護を得ることができるとすれば、その御加護は最後まで私に続くであろう。もしそうでなくとも、私は、私の生存が注目され、特筆されるほどに長く生きて来た。どうしてかという、もうたつぷり三十年にもなるからだ。

第十六章 榮譽について

(a) 名と物とがあるが、名は物を指し示す言葉であつて、物の一部でもなく、実質でもない。物に加えられた別の外にあるものである。

神はそれ自身、十全であらゆる完全さをそなえている

(34) 宗教戦争の始まった一五六〇年、または一五六二年から数えて三十年に及ぶという意味。